四

由布院を見下ろす峠で磐音は振り返った。

二日ほど滞在した湯の里は狭霧の海の下に沈んでいた。

先行していた早足の仁助が音もなく戻ってくると、

「若い妾のお糸がぐずって、西国屋のやつ、うんざりしてますぞ」

「急な話では山駕籠も用意できなかったろうからな」

「馬は怖いというし、大弱りでさ」

「御位とは泣き泣き歩いてるか」

「浪人の一人に背負われて進んでますがね、どこまで保ちますか」

由布院の湯治宿の湯元屋に滞在していた西国屋次太夫一行は、夜中過ぎに突然動き出した。

磐音たちを振り切って豊後関前に戻ろうとしていた。

そのことは一行の動きを見張っていた仁助の知るところとなり、磐音たちも女連れの次太夫たちを追って、古い温泉、湯平への道を追跡することになった。

次太夫たちの行方さえ見失わなければ、できるだけ豊後関前に近い場所で次太夫の身柄を確保すればよいことだ。磐音たちも尾行を覚えられないように早足の仁助が時折り相手の様子を確かめながら進んだ。

「あの分じゃ、府内（大分）城下に下りて、船か駕籠を雇うことになりそうです」

仁助が苦笑いした。

「相手次第の旅です。のんびり行きましょう」

大分川の流れに沿ってうねって続く街道を津々良、網代、馬渡と進んだところで、一行は長い休みを取った。同行していた手代が一行を離れて先行していった。

「なにを考えやがったか」

仁助が後を追った。

磐音立ちは、憮然とした次太夫や駄々をこねるお糸の様子を眺め下ろせる林の中から監視した。

一刻ばかり後、馬が二頭引かれてきた。

仁助と手代の姿はない。

磐音は一行に近づいて様子を窺った。すると馬は湯平で雇われたということが分かった。馬の背に次太夫とお糸が乗って再び進み始めた。

仁助に何かあったか。

危惧を抱いての追跡行になった。

園にすけが汗みどろで戻ってきたのは昼の刻限だ。

湯平からさらに一里ばかり下った庄内の集落の手前だ。

「坂崎様、しくじりました」

仁助の血相が変わっていた。

「どうした、仁助」

磐音がのんびりと訊いた。

「手代の野郎、湯平で馬を雇った後、百姓家に頼んで飯なんぞを焚かせてのんびりしてやがるんで、こちらも一行を湯平で待つのかとつい油断したら、姿を消してしまいました。必死で街道を追っ手みましたが、山道に入ったのか、どこにも見当たらないんで。申し訳ありません」

「なんだ、そんなことか」

と笑った磐音は、

「豊後関前に走って宍戸文六様にご注進したところで、それまでには決着をつけておこう」

「それはそうでしょうが、手代の野郎、こっちを嘲笑っているかと思うと悔しゅうございます」

仁助は面子を潰されたと思ったか、悔しがった。

「いけねえ。腹を立ててたら、朝餉を忘れるところでしたよ」

と仁助は背負った道中袋から竹皮包みを出した。

「あっしもね、手代を真似て、街道沿いの飯屋を叩き起こして握らせたんですよ。飯は残りだが、煮物は煮なおしてくれたんでまだ温かい」

竹皮にはそれぞれお大きな塩握りが三つと、鶏肉と牛蒡、人参、蒟蒻などの炊き合わせと古漬けが入っていた。

腹を減らして進む西国屋の一行は庄内の里で歩みを止めた。

「この分だと今日中に府内に尽きませんね」

ともかく磐音たちとしては、できるかぎり豊後関前近くで次太夫の身柄を確保したい。が、手代が関前に走って援軍を予防と考えている上は、どこで行動を起こすかが思案のしどころになった。

庄内の百姓家に頼んで朝餉と昼餉兼用の食事をとった次太夫たちが動き出したのは、日が傾き始めた刻限だ。

磐音らは仁助が機転を利かせた握り飯で満腹になり、休憩も十分にとってののんびり旅だ。

次太夫らのゆっくりした歩調にうんざりした二人の浪人が、先行したのを見た磐音は、

「仁助、腹ごなしに体を使うとするか」

と誘いかけた。

「合点で」

仁助は呑み込みも早く、街道を迂回する山道に案内していった。

二人が再び街道に戻ったのは、一行より五、六丁も先の曲がりくねった杉林の中だ。すでに林の中は暗かった。

磐音は脇差を抜くとまだ若い杉の幹を四尺ほどの長さに切り、小枝を払って木剣を作った。

浪人の足音が聞こえるまで街道脇の杉の大木の陰に身を潜めた。道の反対側の斜面には早足の仁助が潜んだ。

足音がしてきた。

「山道で野宿じゃな」

「いや、次太夫どのは松明を灯して先に進む気だ」

「府内の知り合いに助けを仮に走った手代は、もはや到着しておろうな」

「それが頼りの夜旅だぞ」

二人が通りすぎようとしたとき、仁助が立ち上がった。

浪人たちが振り向き、

「おまえは坂崎の連れじゃな」

と刀野塚に手をかけて、

その瞬間、後方から忍び寄った磐音の棒が虚空にしなった。ふたりは肩口を強打され、振り向いたところを額を殴られて気を失った。

磐音は木刀を小脇に抱えると一人の足を抱えて大分川の河原に引きずり下ろした。もう一人も仁助が引きずってきた。

西国屋次太夫の一行が街道を通り過ぎていった。それを見定めて、磐音は二人の刀の下げ緒で手足を縛り、河原に転がした。磐音が二人の代償を抜き取って流れに放り込んだ。すると仁助が、

「よからぬ考えを起こさないようにしておきますか」

と懐から小刀を出して二人の髷を切り落とした。

「これはえらいことになったは」

「いくらなんでもこれでは次太夫にあわせる顔がありますまい」

仁助が髷を流れにねげ込んだ。

二人は河原伝いに次太夫の一行を追い越そうとした。すると開けた場所で一行は止まっていた。

馬上の次太夫の怒鳴り声が響いた。

「おまえさんの仲間はどこに消えたんだい！」

残った二人の浪人が顔を見合わせ、その一人が、

「旦那、先ほど通った杉林の手前でなんぞ物音を聞かれなかったか」

「どういうことなんです、堀田さん」

「われらは坂崎たちに尾行されているということだ」

「なんですって！今もどこぞから私どもを見張っているということですか」

「まず間違いあるまい」

堀田と呼ばれた浪人があたりを見回した。

「旦那、どこぞの百姓家に頼み込んで、そこで庄内からの援軍を待つほうがいい」

次太夫はしばらく考えていたが、

「いや、おまえさんの言うことが当たっているとしたら、手代の伊吉だってどうなったかしれたもんじゃありません」

と言うと、

「馬方さん、酒代はたっぷり払うよ。なんとしても庄内まで送っておくれ」

と命じた。

一行は再び庄内城下に向かって進み始めた。

磐音たちは再び前方から松明を灯した一行を見張りながら進んだ。

「なんぞ策はありませんか」」

仁助が磐音に訊いた。

「庄内からの援軍は五合流できると見れば良いかな」

「まずは夜明け前と見ましたがねえ」

「となると一気に片をつけようか」

大分川が川幅を広げ、大きく蛇行する鬼瀬集落に先行すると、そこを待ち伏せの場所にした。

仁助は河原に下りていった。次太夫飲み柄を確保した時の船を探しに行ったのだ。

松明がゆっくりと近づいてきた。

先頭の馬には次太夫が乗り、左右を二人の浪人が固めていた。さらに続く馬には妾のお糸が乗り、傍らには小女が従っていた。

馬方が捧げる松明の明かりに、馬上の次太夫の手に火打ち石式の短筒が持たれているのが見えた。

歯車が回転して火打ち石と摩擦し、それによって生ずる花火が火皿の点火薬に移って発射される仕組みの新式短筒だ。さすがは中崎に出店を持つ西国屋の持ち物だった。

開度沿いに小高い岩場があるのを見た磐音は、その岩場まで先行すると岩によじ登った。

松明がゆっくりと近付いてきた。

馬上の次太夫がすぐ真横を通り過ぎるまで岩場に伏せていた磐音は、次太夫が接近したときを見計らって立ち上がった。

「あっ！」

次太夫が手にした短筒の銃口を磐音に向けたとき、杉の木刀が唸りを生じて次太夫の肩口を強打し、馬上から転がり落ちた。

「おのれ！出おったな」

刀を抜き払おうとした浪人二人の間に飛び降りた磐音の木刀が左右に振られた。奇襲攻撃に驚いて暴れる馬を、必死で馬方が手綱を引いいて宥めようとしていた。そんな混乱の最中だ。

奇襲を掛けた磐音に分があった。

木刀が二人の脇腹と肩口を叩いて、転がした。

次太夫は、路傍に転がり落ちていた。

「馬方どの、騒がせたな」

磐音の家がのんびり響いたときには、馬方も馬を鎮めていた。

「おませさん方はなんだな」

と血相変えて問う馬方に、

「西国屋の旦那に用事があるものでな、そなたらには危害は加えぬ。済まぬが女子衆をどこぞの里まで送ってくれぬか」

そう言うと磐音は木刀を投げ捨て、馬の背にかけられていた次太夫の振り分け荷を掴み、路傍に転がる西国屋次太夫を方に担ぎ上げた。

お糸と小女が愕然と磐音を眺めた。

「騒がせたな」

と二人の女に言い残すと河原に下りていった。

河原では川舟を見つけた仁助がすでに仕度を終えていた。

「せいぜい三里の船旅です。ちょいと小さいが、河口まではなんとか行けましょう」

磐音は次太夫を船の真ん中に転がした。そのそばに磐音が座り、仁助が竿で河原を押して流れに乗せた。

緩やかな流れに竿をさしながらの舟下りが半刻も続いたころ、大分川荷沿った街道を、松明を灯して上流へと急ぐ一団を見た。遠目にもやくざ者の一団と知れた。

案内しているのは、西国屋の手代の伊吉のようだ。

「思ったよりも早いお出ましだ」

「やつらがこの街道を引き返す時分には庄内に着いていたいものじゃな」

「こっちは流れ任せですがね」

仁助はそう言いながらも、舟足を少しでも早めるように流れに竿差してみたが、速度はさほど変わらなかった。

川幅が広がったせいか、流れが穏やかになっていた。

夜がゆっくりと開け始めていた。

「うーん」

と唸って西国屋次太夫が意識を取り戻した。

船底から上体を起こして、磐音と向き合った。

「そ、そなたは……」

「坂崎磐音ともうします、西国屋どの」

「このような無体をなされてだだではすみませぬぞ。私は国家老の宍戸文六様と昵懇の間柄です」

「昵懇が過ぎて、豊後関前藩に外をなされているのではありませぬか」

「なにを証拠にそのようなことを申されます」

西国屋次太夫は磐音ののんびりとした口調に余裕を取り戻した様子で姿勢を改めた。

「そなたさまの荷はそれがしの足元にござる」

次太夫の目が振り分け荷にいき、狼狽の色を見せた。

「西国屋どの、それがしの父坂崎正睦は、そなたから賄賂を受け取られたそうな。父は何の謝礼を受け取られたのでございますな」

「はてそれは……」

「答えられませぬか。ともあれ、それがしはそなたをお直目付の中居半蔵様に差し出すだけのこと。中居様のお調べは江戸でも手厳しいというもっぱらの評判にございますぞ。楽しみになされ」

「坂崎様」

仁助が磐音を呼んだ。

「満ち潮と見えて舟が進みません。これでは陸路を引き返す連中に追いつかれます」

「庄内までいかほどじゃ」

「もはや一里ほどと思えます」

「よし、舟を捨てよう」

磐音は決断した。

西国屋次太夫の顔に喜びが走った。

川舟が岸に着けられた。

「聞いてのとおりだ、歩くことになる」

次太夫がよろよろと立ち上がった。

磐音が手にして板包平の鐺を次太夫の鳩尾に叩き込んだのはその瞬間だ。再び崩れ落ちようとする次太夫を支えた磐音は、肩に担ぎ上げた。

土手に作業小屋が見えた。

「坂崎様、、あっしは庄内に走って関前での舟を用意致します。夕刻には迎えに参りますので、あの子やで待っていただけませんか」

日も高くなろうとしていた。

捕囚を伴い、他国の領内を歩くのは憚りもあった。

「そうしてくれるか」

「へえっ、この舟は向こう岸に置いていきます」

由布院からの街道は向こう岸を走っていた。そのことを考えに入れて、仁助は舟を向こう岸に放置しようとしていた。

磐音は川舟が岸を離れるのを見送ると、河原から土手を上がって作業小屋の前似立ち、流れを振り見た。

仁助はすでに対岸の街道煮立っていたが、振り向いた磐音に会釈すると、早足の異名どおり、朝の光に滲み溶けるように姿を消した。

磐音は西国屋次太夫をの上に横たえると、念のために手拭いで猿轡をかませ、包平の下げ緒で手を縛った。

そして、次太夫が気にした振り分け荷を開いてみた。

片方の籠には着替え、手拭い、扇子に矢立、鼻紙に薬類、金子が百両ほどｋちんと詰められていた。もうひとつの小物籠には、数冊の書き付けが油紙に包まれて収められていた。

その一冊目の表紙には、豊後関前藩御用備忘録とあった。

磐音は作業小屋の粗く張られた板の隙間から入り込む光で備忘録を読み始めた。

引き込まれるように読んでいた磐音の足元で次太夫が再び気を取り戻した。

「西国屋どの、そなた、われらが考える以上に宍戸文六様のふぐりをしっかりと掴んでおるようだな」

次太夫が何か答えかけたが、猿轡のせいで言葉にならなかった。

そのとき、対岸に人声がした。

磐音が板の隙間から覗くと、手代とやくざ者の一団が仁助の放置した舟を見て、なにごとか話し合っていた。

手代の伊吉の視線がこちら岸に向けられた。そして、やくざの頭分に何事か必死の表情で訴えていた。が、頭分は手を横に振って庄内の街道の方角を指し示し、河原から街道へと上がっていった。

磐音は思わず安堵の吐息をついていた。

脇差を抜くと、次太夫の猿轡を切って外した。

ふうっ

次太夫が口を大きく開いて、空気を肺一杯に吸い込んだ。

「あまり無法なことをなさらぬほうが、後々のためですぞ」

「無法はどちらか、考えてもみよ」

二人は睨み合った。

先に視線を外したのは次太夫だった。

磐音と次太夫は残暑にうだりながら、半日を過ごした。

「お待たせしました、坂崎様」

と仁助の声がしたとき、磐音も次太夫も熱さに意識が朦朧とし、さらに喉の激しい渇きに、応える元気をなくしていた。